

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月19日現在

機関番号：31603
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520188
 研究課題名（和文）
 ちりめん本「日本昔噺」シリーズの典拠と翻案及び出版版次の研究
 研究課題名（英文）
 A Study of adaptation and authority, various book of this crape paper boos “JAPANESE FAIRY TALE SERIES” .
 研究代表者
 田嶋 一夫（TAJIMA KAZUO）
 いわき明星大学・人文学部・研究員
 研究者番号：70044724

研究成果の概要（和文）：日本が欧化政策をとっていた明治18年から25年にかけて、日本の記紀神話や、説話、昔話が英訳されてヨーロッパに発信されたのがちりめん本「日本昔噺」であるが、これについて、出典を明らかにし、その上で翻案の状況を分析した。これによって日本文化の何がどのようなものとして発信されたかを明らかにした。また出版量を推定し、文化的意義を明らかにすべく、曖昧な書誌表記の多いテキストのグループ化の方法を確認した。

研究成果の概要（英文）：It applies in 25 from Meiji 18 when Japan had taken the Europeanization policy, and is the KOJIKI myth and NIHONSYOKI myth and a tale of Japan. Although the old tale was translated into English and the silk crape paper book “Japanese fairy tale series” was sent to Europe, about this, appearance was clarified and the situation of the adaptation was analyzed on it. It was shown clearly what [of Japanese culture] was sent by this as what kind of thing. Moreover, the amount of publication was presumed and the method of grouping of a text with much ambiguous bibliographic notation was checked that cultural meaning should be made clear.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成22年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成23年度	600,000	180,000	780,000
平成24年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 日本文学

キーワード：日本文学一般 中世文学 近世文学 比較文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 『ちりめん本のすべて』(石澤小枝子著、2004年、三弥井書店刊)が出版されており、ちりめん本に対する一般的関心はあった。
 (2) ちりめん本「日本昔噺」21作品(No.1

の『桃太郎』から No.20 の『養老の滝』までの21作品、No.16は作品変更があり2点)に集中した学術的な研究はない。

(3) 児童文学としてとらえる視点があったが、江戸の草双紙と「日本昔噺」との間の類

似点の指摘にとどまっていた。『御伽草子』の関連等、古典文学研究からの関心はなかった。

(4) 文明開化期における日本文化の発信、翻訳における異文化翻訳の困難さの問題への関心、外国からの日本への関心等の視点はほぼ皆無であった。

2. 研究の目的

(1) 「日本昔噺」の出典・典拠を明らかにし、その上で翻案の状況を把握する。鹿鳴館文化に象徴されるような欧米文化吸収期であった明治の初期において、日本文化の翻訳、日本文化発信の問題として、実証的に明らかにすること。また、日本古典文学が近代及び欧米においてどのように受け入れられたかの研究でもある。

(2) 書誌表記の曖昧なちりめん本「日本昔噺」シリーズについて版種を明確化することで、書誌の実態を明らかにし、ちりめん本の歴史的・文化的意義、今日的意義を明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) 英訳のちりめん本「日本昔噺」の出典・典拠を明らかにして、翻案の状況を把握し、日本古典文学・日本文化がどのように翻訳され、外国、殊に欧米に発信されたかを分析する。

(2) ちりめん本「日本昔噺」の書誌表記は、各作品毎に一定ではなく、再版、15版、16版、17版、18版の表記が見られる。現存するテキストの中では、「再版」とあるものと、版表記のないものが圧倒的に多い。3版から14版までの版表記を持つテキストは未だ未見である。これらの中に再版から14版までの版が含まれているものと推測される。このように書誌表記の曖昧で、版表記が正確でないと思われる「日本昔噺」のテキストの版を区分する方法として2段階で研究を進める。第1段階は、出版者長谷川武次郎の住所変遷と書誌記述の矛盾、その他の書誌事項(欧題、和題、外題、内題等)の分析、国会図書館納本本の分析等によるグルーピングを行う。次にページ内行数、活字の配置、本文及び本文の組み方(文字フォントの問題)等を分析して、版種を見極めてゆく。

4. 研究成果

(1) ちりめん本「日本昔噺」の出典・典拠を明確化し、翻案状況を把握した。何をどう翻訳したかを明らかにすることによって、日本文化の翻訳の問題を分析した。また他の日本人紹介・関心との違いも明らかにした。

①No. 2『舌切雀』の場合、典拠である昔話の難題部分は省略し、雀を助けたお爺さんがたどり着いた雀の家における歓待が多く描かれ、そこで雀ずん流しという踊りが描か

れている。雀ずん流しは葛飾北斎の漫画にも描かれており、歌舞伎の中で人気のあった踊りと思われ、ここには歌舞伎との関連が見られる。つまり、日本の都市社会の物語となっている。

②No. 4の『花咲爺』の場合、典拠の持っていた犬の報恩(犬の霊力による富の獲得)譚は消えて、となりの爺の失敗譚となっている。

③No. 5『かちかち山』の場合、典拠の昔話のもっていた豊作祈願、農耕習俗に関わる部分はなくなり、兎の狸に対する報復(仇討ち)譚になっている。

④No. 6『ねずみのよめいり』の場合、典拠は江戸の草双紙『鼠のよめ入り』、『千秋楽鼠之娘入』であるが、よめいりの儀式・風習に興味があったこと等を明らかにした。またこの作品の場合、初版本と再版本で本文の若干の変化及び、挿絵の大幅な変化があることを明らかにした。最も大きな変化が再版本にいたって画中詞が消失していること、その画中詞には、耳障りな鼠の鳴き声、梁から小便等の上品ではない言葉があること。これに対して、再版本では、結婚風俗のより具体的な描写、より美しい絵や描写が見られ、江戸の中流以上の社会における婚礼の風習が描かれていること。初版本から再版本への変化の中に、鼠の持っている猥雑性が洗練化されていった様子が見られる。ここにも歌舞伎踊りが描かれ、都市社会が紹介されている。

⑤No. 7『瘤取り』の場合、典拠は『宇治拾遺物語』の説話であること。『宇治拾遺』には「暁に鳥など鳴きぬれば、鬼ども帰りぬ」とあって、鬼と「ケ」(「ハレ」関係)の時間との関係、つまり鬼は「ケ」の時間にのみ現れるもの、が表現されているが、ちりめん本はその理解がなく、単純に“Just then the day began to dawn and the birds to sing, so the devils hurried away”と訳されていることを明らかにした。

⑥No. 10『松山鏡』では、典拠である中世説話や狂言では、鏡を知らない男が笑われるという滑稽譚の要素があったが、その滑稽譚を捨てて、娘が母にそっくりに育つ、母への思慕、母の娘への愛、家族愛の抒情的物語として翻訳されている。

⑦No. 15『俵の藤太』の場合、訳者は明治の外国人教師 B.H.チェンバレンであるが、典拠としたものは馬琴の『昔語質屋倉』中の「俵藤太竜宮入りの弓袋」であること。また御伽草子の『俵藤太』も利用しており、「日本人から聞いて訳した」(長谷川武次郎の関係者談)ような安易な方法はとっていないこと。物語化にあたっては、御伽草子の中にあつた藤太秀郷の破格と思われる出世物語の要因(龍宮訪問による富の獲得)には目を向けず、

単純に巨大な英雄の冒険物語として描いたこと。

⑧No. 13の『海月』は、これも訳者はB.H.チェンバレンである。「猿のいききも譚」あるいは「くらげ骨なし」として、仏典にもあり、類話が世界的展開を持つ説話の場合である。ここでは出典にこだわることなくのびのびと翻訳している。そして結婚の風俗・行事の描写が興味深く描かれていること。結婚行事は「ねずみのよめいり」(NO.6)でも描かれていることであり、異文化として興味を惹く話題であったようだ。

⑨No. 9『八頭ノ大蛇』も訳者は、B.H.チェンバレンである。ちりめん本が典拠としたものは、同じ著者の英訳“KO-JI-KI”である。チェンバレンは『古事記』を古代日本を知るための大切な書物としてとらえ、逐語的に全訳するとの立場で翻訳していた。『古事記』の中の神々を翻訳するにあたって“Kami”に相当する英語がないと主張していた。その主な根拠は、ヨーロッパにおける神々が重々しく畏敬の念を持つものに対して、日本におけるKamiの用例には畏敬の念を起させるものがないという根拠であった。そこで“God”ではなく、“Deity”(神性を持つもの)と訳した。さらにちりめん本『八頭ノ大蛇』を書くにあたって、神話性を捨てて“fairy-tale”としたことを論証した。ここには、日本の「神」をどのように理解するかの基本的課題がある。一神教の問題よりも、外国人教師としてのチェンバレンの立場が微妙に反映しているようにも見える。

以上のような「鬼」や「神」の他に、「龍宮」(異郷)、米から作る「酒」、農耕儀礼など翻訳に苦労していた、あるいは理解できなかったことなどがある。総じて、都市化された日本、野蛮な国ではなく、豊かな文化を持つ国として紹介されている。

以上、正確な出典、典拠の確認、翻案の状況等を論証し、その上で文化の翻訳の問題を分析した。今日の国際社会における日本理解とも関わる重要課題である。

(2) 版種の明確化についての研究

1940年に18版が確認できた『桃太郎』『舌切雀』『猿蟹合戦』の最初に出版されたのは、1985年である。1937年に17版の出版が確認できたのは、『浦島』と『松山鏡』である。すると五十五年間で18版、つまり、3年あまりで新版がでてことになる。また版表記が明確になるのは1917年の15版からである。この15版以前の3版から14版までの版表記が見つからないのであるが、版の管理は行われていたと考えられるのである。

各作品毎におよそ40本のテキストを収集・分析した。この中で「再版」とあるもの、版表記のないテキストを中心に、出版者長谷川武次郎の住所変遷と書誌記述の矛盾、その他の書誌事項(欧題、和名題、外題、内題等)の分析、国立国会図書館納本本の分析等によるグルーピングを行った(第1次グルーピング)。

その結果、版表記の疑わしいテキストが、作品ごとに8~10種に分類できた。またこれらのテキストの推定出版年代は1890年から1916年頃までの30数年間である(再版本以降の最初の版表記で確認したものは大正6年(1917)の15版で『八頭ノ大蛇』である)。全作品についてこの作業が済んでいるわけではなく、今後も調査と分析が必要である。明治8年の出版条例では、出版届け以降30年間は有効となっていたことを併せ考えると、この間も出版され、版管理も行われていた可能性がある。本研究によって、書誌表記の明確な15版以前のテキストの大半を明確にできる可能性が出てきた。

また、本文変化がやや大きくみられたのがNo. 6『ねずみのよめいり』である。これについては研究成果の④に記述した。No. 1『桃太郎』の場合、本文上の変化ではないが、挿絵の変化が大きい。初期の版の挿絵は、歌舞伎絵風の若衆風から後の版では、田舎の若侍風に変化している。絵の変化も、本文の変化と同様に作品分析に反映させる必要性を示している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

田嶋一夫 ちりめん本における記紀神話—No.9『八頭ノ大蛇』の典拠と翻案— いわき明星大学大学院人文学研究科紀要 11号 2013. 3 pp.1-11

田嶋一夫 ちりめん本「日本昔噺」シリーズ『海月』考 いわき明星大学大学院人文学研究科紀要 10号 2012. 3 pp.13-21

田嶋一夫 ちりめん本「日本昔噺」シリーズ『俵の藤太』考 いわき明星大学大学院人文学研究科紀要 9号 2011. 3 pp.16-24

田嶋一夫 ちりめん本「日本昔噺」シリーズと中世説話文学 説話文学研究 45号

2010. 5 pp.166-175

田嶋一夫 ちりめん本「日本昔噺」シリーズ
『ねずみのよめいり』考 いわき明星大学大
学院人文学研究科紀要 8号 2010. 3
pp.1-14

6. 研究組織

(1)研究代表者

田嶋 一夫 (TAJIMA KAZUO)

いわき明星大学・人文学部・研究員

研究者番号：70044724